

## オンライン授業と対面授業の併用で考える

5月の連休明けに始まった前期授業は新型コロナウイルスの感染対策の遠隔授業の構築と運用で慌ただしく過ぎ去っていきました。教職員からは無事に遠隔授業を実施できたことの安堵の声や遠隔の方がうまくいった授業もあったなどという声も聞かれましたが、大学の対応に振り回されたのは他でもない学生たちです。京都情報大学院大学の土持ゲーリー法一教授は教育學術新聞の9月8日号に寄稿し「オンライン授業が教員から高い評価を受けていることと教育効率が良いことは別問題である」と指摘し「オンライン授業は授業で最も重要なフィードバックが欠如しており、教育の質の低下を危惧している」と述べています。

そこで本学では前期終了後に実施した教職員研修会で、オンライン授業で気づいた事例を各学科系から発表してもらいました。アンケート調査の結果画面が小さなスマホで授業を受けた学生の満足度が低かった事例や課題提出・試験の工夫などの報告があり、有意義な情報共有の場になりました。中でも感心したのは、遠隔授業は学生の目が疲れることに配慮して画面の背景や文字の色、大きさを工夫したという報告があったことです。改めて多様な視点で考えることの重要性を再認識しました。これらの報告を詳しく分析して現場にフィードバックし今後に生かしたいと考えています。

間もなく、後期授業が始まりますが、今期もウィズコロナでキャンパス内の学生数を定員の半数以下に抑えるため遠隔授業と対面授業との併用で進めます。現在先生方に遠隔授業導入後の教育ポートフォリオを作成してもらっていますが、今後、学生にも学修ポートフォリオを導入して授業デザインの見直しが出来ないかと考えています。各講義を遠隔か対面か二者択一で選択するのではなく、それぞれの良さを生かしたハイブリッド型で行うなどして学修成果を上げることが、学生や保護者の満足度を上げることに繋がると考えています。

## 第4次産業革命をキャッチアップする

浦賀沖に現れた黒船(蒸気船)を見て諸外国との力の差を知った明治政府は殖産興業や富国強兵策を掲げて、お雇い外国人を招聘するとともに多くの若者を留学させて技術の修得と人材育成に努めキャッチアップに成功しました。産業の主体が農業から工業にシフトし人口が都市に集中するようになりました。20世紀に入るとアメリカやドイツが石油を使った内燃機関や有機化学を発展させて第2次産業革命を起し大量生産時代を迎えます。ここでも出遅れた日本は戦後復興期に政府主導の重点産業を優遇する計画経済政策をとり、所得倍増計画を掲げて最新鋭の生産技術・設備をあえて導入しました。企業では協調性豊かな人材が全社を挙げて品質管理などに取り組むことで生産性を向上させ高度成長を実現しました。

しかし、冷戦終結後の1990年代になるとアメリカからインターネットやGPSなど軍事機密であった情報技術が民間に開放され第3次産業革命が始まります。音声や映像データがデジタル化されコンピュータ処理が可能になりました。2001年にアップルのiPodが登場するとソニーのウォークマンが危機に瀕しました。その後、iPhoneが登場し、今やスマートフォン無しの生活は考えられない社会になりました。このような中で高速インターネットやクラウドサービス、5Gなどのデジタル革新と人工知能の進化が相まってあらゆる部門でブレークスルーをおこす第4次産業革命が始まったのです。既にAmazonやUberなどのサービスも生まれています。

与えられた仕事を確実にこなす教育が主体であった日本では見本がない新たなデジタル社会の到来に苦戦し失われた30年とも言われています。この2周遅れの現実を前に政府は今回も人材育成でキャッチアップを目論んでいます。そこで教育界に「数理・データサイエンス・AI」といった基礎力に加え人間を中心に考えてAIを使いこなす創造力豊かな人材の育成が求められていますが、現場から見ると成功の鍵は土台となる教養教育ではないかと考えています。